

会報誌 有縁千里

うえんせんり No.38



株式会社 西村交益社

http://www.koekisha

- 神棚
- うえん会レポート
- 本の紹介「家計簿の中の昭和」
- 本やさんの紹介



兵庫県学校厚生会指定店



「インプットの量を増やすには、『本から学ぶ』『人から学ぶ』『旅から学ぶ』、この三つ以外にない」という言葉を最近知りました。

『本から学ぶ』のは、自らの意志さえあれば、比較的簡単に行えますが、疑問を感じてもすぐには答えてくれません。でも外れたと思えば、読むのをやめればよいのです。

『人から学ぶ』のは、相手によりけりかも：当たり外れは縁次第？でも、「我以外皆我師」とも言うではありませんか：

『旅から学ぶ』のは、どうしても費用と時間がかかります：旅に出て、一人になって沈黙を考えるのか、旅の出会いで“有縁の人”から学ぶのか：

十一月におこなった、第二一回有縁会の講師は、大学の恩師でした。思い起こせば三十有余年、ゼミ選択のオリエンテーションでの出会いから始まりました。

当時、生きること以上に死について考え抜いていた私は、倫理学専攻の担当教官であった恩師に「死について学びたいのですが：」と勇気を奮って質問をしてみたら、「死について取り扱うのは倫理学ではなく西洋哲学だよ」と、懇切丁寧に、尚且つやんわりといなされ、ゼミへの参加を拒否されてしまいました。「来る者は拒み、去る者は追わず」でした。それを、どんな山勘であったのか、無理やり無縁の扉を自らこじ開け、有縁の人になってもらったのです。どうやら、その山勘は正しかったようです。もともとそれは学問的だけでなく、酒縁というものでもあったのですが：

「人生に必要な知恵はすべて幼稚園の砂場で学んだ」などという大げさなタイトルの本が昔ありましたが、数えきれないほどお相伴にあずかった酒席で、さりげなく平々凡々でありながら誠実で真摯に生きる一モデルを教わったように思います。そう考えると、人生のインプットは、本や人や旅に加えて、酒を通して学ぶこともあるのだと感じています。

もともと酔っぱらいは、いくら良い話を聞いてもアルコールと共に流失してしまうこともしばしばありますが：それでも、恩師とつれづれに飲み明かした三十数年は、酒と共に過ぎ去った至福の時でありました。

不要の方はお手数ですが下記迄ご連絡ください。今後一切送付しないよう致します。TEL 079-6662-5909


 神棚

養父市内の多くの家庭では、神棚と仏壇があることは珍しくありませんが、核家族の新築家庭には、神棚がないお家も少なくないようです。

神棚や仏壇は、家庭で日常神仏と向き合い、礼拝できる日本独特の文化です。一般の家庭で神棚を祀るようになったのは、江戸時代中期と言われています。伊勢神宮信仰が民衆化された時期に、お伊勢参りにいけない人々のために、御師（おんし）と呼ばれる布教師が、諸国を回って伊勢神宮のお札を配りました。このお札を安置するために、各家庭で神棚を祀るようになったようです。

神棚は棚の上に祀られたお宮なのですが、御神体を祀る所ではなく、お札を祀る所です。その意味では、神社と神棚はニュアンスが異なるといえます。しかし、お札には「神徳（しんとく）」がありますから、「家内安全」「無病息災」「厄除け」など、さまざまに利益を得ることができのです。

## 追伸…喪中の心得

家族が亡くなった場合、神棚の祭りは中断します。一般的には神棚の前に半紙を貼って毎日のおつとめを中止します。普段の神祭りを一時中止して、死者の靈魂を祀ることに専念するわけです。死者の靈魂の落ちつきを得る忌明けに、神棚の祭りを再開します。



 うえん会レポート

作家の野坂昭如が歌うCMソングで「ソ・ソ・ソクラテスかサルトルか、ニ・ニ・ニーチエかプラトンか、みんな悩んで大きくなった。」を憶えていらっしやるでしょうか。哲学者の名前をこの歌で覚えた方も多いかもれませんね。

「哲学なんか何の役に立つの?」と言われると、「世の中、役に立たないことのひとつもあつていい。」と思ったりします。哲学は、個々の学問では、答えられない「生と死」の問題や、「生甲斐」「愛について」「幸福とは何か」「美とは何か」などが対象となる学問です。

今回の有縁会の講師は哲学の先生でした。鈴木幹雄先生は大谷大学名誉教授で倫理学・フランス近代思想がご専門です。「死後のゆくえ」のタイトルを見て、死後の世界や霊界の事と思われた方も少なからずおられたと思います。

しかし穏やかな口調で語られるお話は、哲学とも宗教学とも心理学ともいえる内容で、参加された皆さんは、真剣にメモを取っておられました。

参加者の方の感想を紹介します。

「自分にとって死とは何なのか、死をどのよ  
うに受け止めたら良いのか、考えれば考える  
ほど分からなくなってくる。しかし誰も万人  
一人残さずその時が来る。早晚その時が来る  
のが確実なのに、真剣に考えずに死を迎える  
のが良いのか(中略)何も考えずともそれは  
それで良いのではないか・・・今日の先生の  
お話で思い返し、死について十分考えてみよ  
うと思います。」

「今日は良いお話をお聞きして、とてもよか  
ったです。死んだ人の思い出を寄せ集めるこ  
とによって、亡くなった人の思い出が大きく  
なり、いつまでも話を続けられる。こんな話  
を聞くことが出来た事、嬉しく思います。」  
「哲学的で少し難しく感じました。でも一日  
一日を大切にしようと思いました。」

私達はその瞬間、その時々で判断を下しな  
がら生きています。間違った判断を続けられ  
ば、よくない人生、「だから人生」となっ  
てしまいます。自分の人生を「いい方向」に  
向けて、より良い人生を生きる知恵を、偉大  
な先人から学んで行けるのが、哲学の意義で  
す。人類は、ブツダやアリストテレスから中  
庸を、セネカから人生の時間の使い方を学  
び、カントから世界平和の方法を、キルケゴ  
ールから絶望からの脱出方法を学びました。

現在直面しているいろいろな問題に、哲学  
はその本場に正しい答えを与えてくれるの  
ではないかと思いました。

参加された皆さんは「よりよく生きる」  
ことを真剣に考えておられ、私達もその姿  
勢を見習わなくてはいけないと思いまし



千歳万色



本の紹介



澤地久枝  
「家計簿の中の昭和」

家計簿をつけている主婦は全体の約五〇%。某  
生保会社のアンケート調査の結果です。明治生ま  
れの私の祖母は、物価記録的な家計簿を八十年近  
くつけていました。ハイカラだった祖母は、大阪  
によく出かけておりました。「心齋橋 コーヒー  
五十円」と書かれたメモは、昭和三十〜四十年代  
のものだと思えます。今のコーヒーマシンの値段は、三  
百五十円から四百円位でしょうか。祖母の法事で  
は、その家計簿を見ながら、親類と「昭和」を懐  
かしみました。皆様は家計簿をつけていらっしゃ  
るでしょうか。

今回は、そんな家計簿にまつわる本を紹介いたします。生活史とも自伝としても読める、読み応えのある本です。作者は、昭和三十八年五月からずっと、どんな名目でお金が入り、何に使ったかを家計簿に付けており、勤めていた頃の給与明細などの書類も残っていました。緻密に記録された家計簿がこんなに面白いとは思いませんでした。単にモノの値段や数量だけではなく、昭和の激動期を凜として行きぬいた清々しいまでの生き様まで記されているように感じました。

旧満州からの引揚げの決算、戦後初めてかけたパーマ代、安保の年の結婚費用、向田邦子と旅した世界旅行の代金、石油危機の買溜め品、そして終の棲家の建築費……。家計簿の中の数字を通して、昭和という時代が生き生きと描かれています。また逆に、おそらく日本中が金銭の出入りを記録できなかった時期、戦争末期から敗戦後にかけての統制経済の時代。どのように収入を得、いくらで主食となる米麦、さつまいもなどを買ったのか……。売買の現場や現物を背負って運ぶところを警官に見つかれば、品物の没収だけではすまなかった、闇市を使わなければ生きて行けなかった時代も昭和にはあったという事実。家計簿を付けると

う行為は、違法行為の証拠資料となるのです。家計簿の記録が残っていないことが、かつてそういう時代が日本にあったという記録になっています。昭和史の明と暗が家計簿を通してくつきりと書かれています。

※この本を三名の方にプレゼントします。ご応募は、電話・ハガキ・ホームページの問合せフォームよりお待ちしております。締め切りは二月十五日。

※いつも沢山のご応募ありがとうございます。当選は発送をもって代えさせていただきます。何卒ご了承ください。

養父市内の商業集積地“Yタウン”にある「やぶの本屋さん」の店主は、高校の同級生の齋藤貴明君ですが、彼からこの冬、素敵な贈り物をもらいました。店内の書棚の一角に弊社コーナーを作ってくれたのです。

ここには、過去にこのうえんせんりで紹介した本や、毎月一冊ずつ社員教育用に全員で読んでいる課題図書などを、並べてくれています。書評のPOPも社員が手書きで書かせてもらっています。

書棚を覗くとその人の人生と思想が分かると言いますが、書棚のレイアウトと陳列本は定期的に更新しています。お近くにお越しの際は、一度覗いてみてください。ご来店をお待ちしております。

### やぶの本屋さん

電話兼 FAX : (079) 664-1616



### 静夜思

逆らってはいけないもの。カーナビの指示にカミさんの物申し：千に三つも間違いなし。浅はかな知恵で反抗論しようものなら、車は目的地に着けず、我身は倍返しならぬ百倍返しに嵐に襲われる。いずれも後の修復にかなりの時が必要である。

ロマン・ロランは「いつまでも続く不幸はない」と言ったが、ここは勇気など出さず、じつと首をひっこめ、嵐の通り過ぎるのを待つが最善：まあ、この護身術を身に着けるまでどれだけの代償を支払っただろうか：どうもこの件についても学習能力は甚だ欠如していたことに、漸く気が付いた。「老いてはカミさんとカーナビに従う」ことで、残りの人生を平和に過ごしたいものである。